

「政治の根源に向けて—ホッブズとヴィーコにおける科学・歴史・レトリック」

山口 正樹

〔報告要旨〕

本研究の目的は、ホッブズとヴィーコを中心にしながら、ルネッサンスからバロックにかけての初期近代ヨーロッパにおける科学・歴史・レトリックの関係を明らかにするものである。具体的には次の二つの視点から分析を試みることにする。

まず第一の視点として、ホッブズを中心にしながら、人文主義の技芸に対する近代哲学の批判を明らかにする。17世紀という時代は、歴史・レトリック・詩といった従来の人文主義的な教育理念に疑問を投げかけ、「自然という書物」を数学的自然学によって明らかにしながら、ひとつの普遍的な知を探求しようとした世紀であった。その世紀を代表する哲学者であるデカルトは、直感と演繹による普遍的な学の方法を打ち立てるにあたり、「書物による学問」といった人文主義的な教育理念には否定的であった。デカルトが書物の権威を否定することによって人文主義の理念を格下げしたように、ホッブズもまた、歴史やレトリックといった人文主義の技芸を経験的で蓋然的な知識としてあくまでも科学から区別した。なぜならホッブズにとって、科学とは、普遍的な原因から推論されることによって得られる絶対確実な知識であったからである。それゆえホッブズにとって、歴史やレトリックといった人文主義の技芸は経験的なものであって科学ではありえなかったのである。

これに対して、初期近代においてヴィーコが注目される理由は、デカルト主義が蔓延していた当時のヨーロッパにおいて、人文主義の立場からレトリックの重要性をとりわけ強調したからにほかならない。これが人文主義からの近代哲学批判という第二の視点である。ヴィーコのレトリック論が重要であるのは、科学の探求もされることながら、人文主義的な知恵の涵養こそが教育の最大の目標であると説いたからであった。つまりヴィーコは、真理を唯一の目的とする学問の方法に対して、レトリックの習得のためにも共通感覚や真らしいものといった人文主義的な理念が重要であることを主張したのである。こうしたヴィーコのレトリックの関心は、その『新しい学』(1744年)にも受け継がれている。その第二巻「詩的知恵」において、ヴィーコは言語の起源を問いつつ、言語の根底にある比喩の役割を強調している。かれによれば、言語はこうした比喩による転移の機能があるからこそ、分節化された多様な意味を持つことが可能になるとしている。それゆえヴィーコにとって言語とは、デカルトやホッブズのように、理性的な命題関係のもとで固定化されるようなものではなく、あくまでも指示対象の捉えきれることのない残余が常に残されているといえるのである。

以上が近代哲学とヴィーコの比較を通じて得られる興味深い論点である。この二つの視点を対比させながら、初期近代ヨーロッパにおける科学・歴史・レトリックの関係を論証し、さらにそれが政治の問題といかに関係しているのかも論証していく予定である。

やまぐち・まさき、1974年7月26日生まれ、早稲田大学大学院政治学研究科博士課程。

〔報告者のこれまでの論文〕「歴史の政治学——ホッブズとヴィーコにおける科学と歴史——」(『早稲田政治公法研究』第68号、2001年、309-339頁)、「近代政治学と人文主義の技法——ホッブズとヴィーコにおけるレトリックの問題——」(同、第70号、2002年刊行予定)。